

陽明学関係書 紹介と短評

○吉田公平著『陽明学が問いかけるもの』

平成十二年五月、研文出版社刊。B6版、226頁。

第I部

- (1) 東アジアにおける中江藤樹の位置
- (2) 陽明学研究の今日的課題
- (3) 夏目漱石と西田幾多郎―心は善か―

第II部

- (4) 陽明学が問いかけるもの
- (5) 陸象山はなぜ主役になれなかったか
- (6) 王龍溪について
- (7) 王陽明の朱子学批判
- (8) 石門心学と陽明学
- (9) 性善説の社会的背景

第III部

- (10) 北京日本学研究中心・一九九五

あとがき

本書は、表題の文が書き下ろしであるほかは、『東洋古典学研究』『藤樹研究』の二誌に掲載されたものである。

第I部は、講演発表よりなる三編で、(1)は、藤樹研究会における講演で、アジア的グローバルな視点から見た陽明学、また我が

国における受容の形を中心に、中江藤樹を見だして位置づけるもの。(2)は、京都国際会議場で行われた国際陽明学京都会議において発表されたもので、陽明学研究を、①哲学的研究、②社会思想史的研究、③伝記研究、④書誌学研究、⑤未刊稿本の調査、⑥論争史のなかの陽明学、⑦陽明学における他学派・他宗教の理解・評価、⑧中国域外への伝播とその比較研究、という八つの面からの課題について言及しているが、最後に今後の問題として、現代人の理解促進のために、現代語訳に取り組む必要を説いている。

(3)は、活水学院の日本文学会での講演で、陽明学に親しんだ夏目漱石と西田幾多郎を、陽明学研究者の視点から解明したもの。

第II部は、著者の専論であり、陽明学、陽明心学の先駆者である陸象山の学問、王陽明の弟子の王龍溪、また王陽明の朱子学批判から、陽明学の江戸時代における受容と石門心学との関係等が論じられている。これらについては詳しい書評が待たれる。

第III部は、「北京日本学研究中心・一九九五」のタイトルのもとに著者が北京の日本学研究中心に派遣された中で参加した次の三つの学会と、中国における研究状況の報告である。

- (1) 「世界の日本学と中国の日本学」
- (2) 「第一四回、退溪学国際学術会議」
- (3) 「東亜伝統文化と現代化、学術討論会」

○張建業 主編、劉幼生 副主編『李贄文集』全七卷

二〇〇〇年五月、(北京)社会科学文献出版社刊。

第一卷『焚書』『統焚書』劉幼生 整理。